

論文概要

筑波大学審査学位論文（博士）

1970年代以降のドイツにおける改革教育的な学校改革と授業実践

—学校と生活の接続問題をめぐる授業の構成理論—

人間総合科学研究科 学校教育学専攻

田中 怜

本研究の目的と問題設定

本研究の目的は、1970年代以降のドイツを対象にして、改革教育的な学校改革と授業実践がいかにして取り組まれてきたのかという問いに対する究明を行うことで、学校と生活の接続を果たす授業の構成理論を提示することにある。

学校の中で学習する知識や技能が、どのように学校の外の生活に結びついているのか、あるいは学校で教える事柄を、いかにして子どもの現在・将来の生活に関連させていくか。これらの問いは、極めて素朴であるが根深い問題である。古くは20世紀初頭の改革教育(新教育)の運動において、また近年では新たな資質・能力論の文脈で、学校での学習と生活での行為との間の連関は、強く希求されてきた。本研究ではこれを「学校と生活の接続問題」と通称し、1970年代以降の(西)ドイツを対象として、この問題をめぐる理論と実践の諸相を解明した。

その際の問題意識は、近年の教育改革を方向づけている新たな資質・能力論から導き出されている。学校の中で知識を蓄積するだけではなく、それを「真正な文脈」において実際に使用することで実生活における活用力を育成するという発想は、種々の資質・能力論に通底した思考様式となっている。しかしながら、学校という人工的な空間の中に「真正な」現実を整えることができるという想定は、再提示が学習の作為性と隣り合わせであることを忘却しているのではないか。さらに、学校で育成された資質や能力が学校外でも意図通りに生きて働くという考えは、学校での学習と生活での行為との間に因果的な予定調和を想定することで初めて成り立っているに過ぎないのではないか。近年の資質・能力論の批判的な検討を通して透けて見えるのは、それが複雑化した社会を授業の中で再提示することの困難性を度外視し、何を表象として代表的に再提示すべきかという問いを手放しているということ、そして、学校の中で訓練された資質や能力が因果的に学校外でも機能するという予定調和的な観測の上に成り立っているということである。

本研究では、生活との関連で何を代表的に教えるべきかという問いとの対峙の欠如を意味する第一の問題性を「現実の再提示問題」と名付け、また現在の学習と将来の行為との間に必然的な結びつきを想定する第二の問題性を「学習と行為の因果性問題」と命名した。そして、「学校と生活の接続問題」が再び問い直されなくてはならない理由を、新しい資質・能力論に潜在するこの二重の問題性から導き出した。

それでは、複雑性の増す近代社会において、現実を再提示することはいかにして可能なのか、そして学校での学習と将来の生活の間の予定調和的な因果連関を、どのように回避して授業を構成することができるのだろうか。この問いに回答を与える事例として、本研究では1970年代以降の西ドイツおよび東西統一後のドイツにおける改革教育的な学校改革と授業実践に着目した。

各部の概要

本研究は三部構成となっている。

第一部では、1970年代の西ドイツで先鋭化した改革教育的な学校改革を取り上げることで、そこで試みられた学校と生活の接続方法の特徴と、改革過程で浮き彫りとなった限界を指摘した。具体的には第一章で1970年代に西ドイツを席卷した学校批判の言説と、そこから生まれたオルターナティブな学校の設立運動について検討した。その結果として、1972年に創設された西ドイツ初のオルターナティブ学校であるグロックゼー学校

(Glocksee Schule)では、現実への適合ではなく批判を積極的に促す反権威主義的な授業の実施を通して、学校での学習と生活での行為との接続が構想されていたことを明らかにした。こうしたグロックゼー学校の取り組みは、「現実の再提示問題」という点では、学校の外に広がる社会をありのままに学習の文脈として設定するのではなく、むしろ子どもたちがそれに批判的に取り組むことができるように独自の観点から学習対象を構造化するという点で特徴的であった。第二章では、この社会批判的な学習対象の構造化が、グロックゼー学校において理論的に彫琢されることなく頓挫したことを指摘した。それは、1980年代以降に勃発した学校規模の拡大をめぐる議論との関連で、グロックゼー学校の関係者が創設期の理念の修正に着手したことによる。こうして、1970年代の反権威主義的な学校改革は、制度的にも授業実践の点でも、改革プロセスの中で学校化への傾斜を余儀なくされていき、「現実の再提示問題」を授業論として深化させるには至らなかったことが明らかとなった。

第二部では、反権威主義の機運の退潮により社会の変化に適合しない教育そのものが批判と改良の対象として登場した1980年代の改革教育的な運動の取り組みを検討の遡上に載せた。具体的には、第三章で1980年代の西ドイツの改革教育的な運動を「下から」草の根的に推し進めた「実践的学習」(Praktisches Lernen)のプロジェクトに着目した。これに対して第四章では、「上から」の改革教育的な授業改革を推し進めたノルトライン・ヴェストファーレン州の枠組み構想「学校生活の形成と学校の開放」(Rahmenkonzept „Gestaltung des Schullebens und Öffnung von Schule“)を取り上げ、学校と生活を結びつけるための改革教育的な試みの理論と実践、そしてそれに対する批判の諸相を整理した。その結果、いずれの取り組みにおいても、現実の真正な場面を学習の中に設えることに重きを置く限りで、「現実の再提示問題」を不問に付していたことが明らかとなった。また、そうした学校内の実践的行為が将来有用に働くとの両者に共通する前提は、「学習と行為の因果性問題」を問う余地を限りなく狭めていたことも指摘した。ただし注視に値するのは、このような改革教育的な試みに対する批判の論理の中から、「現実の再提示問題」と「学習と行為の因果性問題」の問い直しが生じていた点である。第五章では、この新たな論点に理論的に応答した事例として、教授学者クラウス・プランゲ(Klaus Prange)の学校論を検討した。プランゲは、学校と生活の接続の不可能性を強調するばかりではなく、「あらゆることが別様でもあり得る」社会の中で学校と生活の接続を担保する授業の在り方を提起していた。その要諦は、知識や方法を問い直して別様の可能性を見出す「反省的学習」の促しにあった。プランゲの提案を検討した結果、反省的学習を促す授業の構成理論は、「現実の再提示問題」という点では学校外の生活現実を越え得る偶発性を学校内で人為的に演出する可能性を含んでおり、また「学習と行為の因果性問題」という点では、予測可能な因果連関を越えた多様な将来の生活との結びつきを授業で提示する必要性を示唆していることが明らかとなった。

第三部では、1990年代の東西ドイツ統一後の改革教育の復古運動の中で、学校と生活の接続問題を問い直す「改革教育批判の改革教育」の流れが起きていたことに注目し、その理論と実践を検討した。それによって、生活との差異を活かした反省的学習の促しを授業としていかに構想することができるのか、という問いに対する答えを明らかにした。具体的には、第六章において旧東ドイツ地域で巻き起こった改革教育的な学校改革に注目し、その一環としてテューリンゲン州で取り組まれた学校実験「イエナ・プラン・ヴァイマル」

(Schulversuch „Jena-Plan Weimar“)を分析対象とした。学校実験の理論と実践を分析した結果、この学校実験で授業構成の方法として用いられた「多視点的授業」(Mehrperspektivischer Unterricht)の教授学的原理は、プランゲが提起した反省的学習の促しのように、生活との統合ではなく差異を活かして学校と生活を接続させるものであることが明らかとなった。第七章では、生活との差異を活かした多視点的授業が遂げた発展について、学校実験終了後の 1990 年代後半から 2000 年代に取り組みされた国際共同研究「ヨーロッパ・プロジェクト」(Europa Projekt)の事例から明らかにした。そして授業の実践事例の分析に基づいて、現実を複眼的に観察する多視点的授業のモデル(「多視点性モデル」)を提示した(図 1)。生活との差異に基づく多視点的授業は、「現実の再提示問題」という点では、現実場面に学習を近づけるのではなく、むしろ学校外の生活を複数の視点から意図的に複雑かつ偶発的なものとして再提示することに力を置いている。また、「学習と行為の因果性問題」と関係して、こうした現実の多視点的な再提示は、将来の生活を先取りするのではなく、むしろ遭遇し得るかわからない不確実な将来に向けて多様な学習の回路を確保することで、因果論的な連関を越えた別様の可能性や多面的な現実を子どもたちに指し示す点を特徴としている。その方法論的な要点が、現実を複数の眼差しから「多」視点的に捉えること、そしてその中である視点を別の視点へと向け変えさせる視点の転換を導入することであることが明らかとなった。

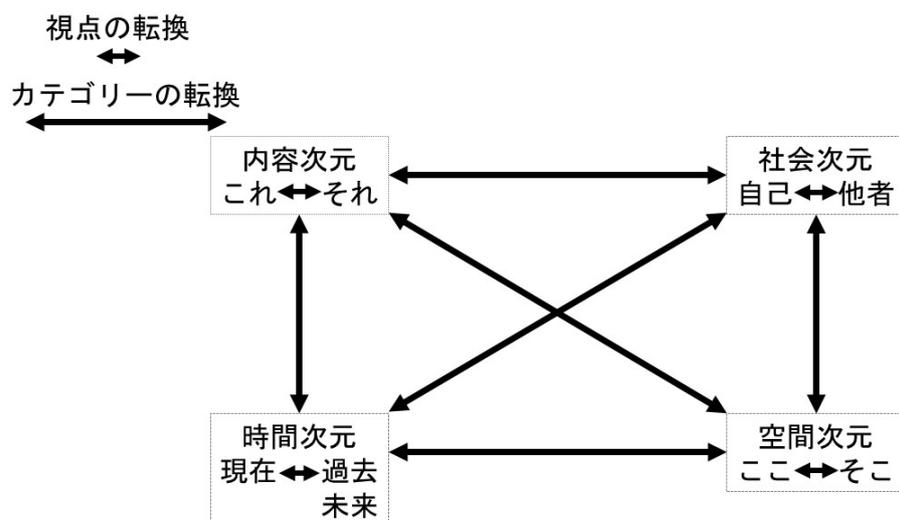


図 1: 多視点的授業の「多視点性モデル」

本研究の成果

終章では、以上の分析を再び整理するとともに、そこから導き出すことのできる本研究の教育方法学的な示唆を次の 3 点にまとめた。第一に、改革教育の是認的な受容に終始していた教育方法学研究に対して、改革教育の中に進歩主義的なオルターナティブを捉えるのみならず、その前提や方法を批判的・構成的に吟味し、改革批判からさらなる改革の方向を見出すアプローチの可能性を示した。第二に、学校と生活の接続を因果関係として把握することから、両者の間を相関関係として捉えることで、現在隆盛している資質・能力論の問い直しの必要性を示唆した。そして第三に、現実を多視点的に提示し、現在と将来

の繋がりを因果関係を越えて豊かに示す反省的・多視点的授業の構成理論を図2のように示した。近年の改革動向では、子どもが「何を知っているか」から「何ができるか」への力点の移行が重要であるとされている。これに加えて複雑性をメルクマールとする近代社会では、子どもが「何を(どう)見ているか」という視点性の問題を加えることで、授業において多様な視点を出現させ、それらを転換させることが肝要となることを指摘した。

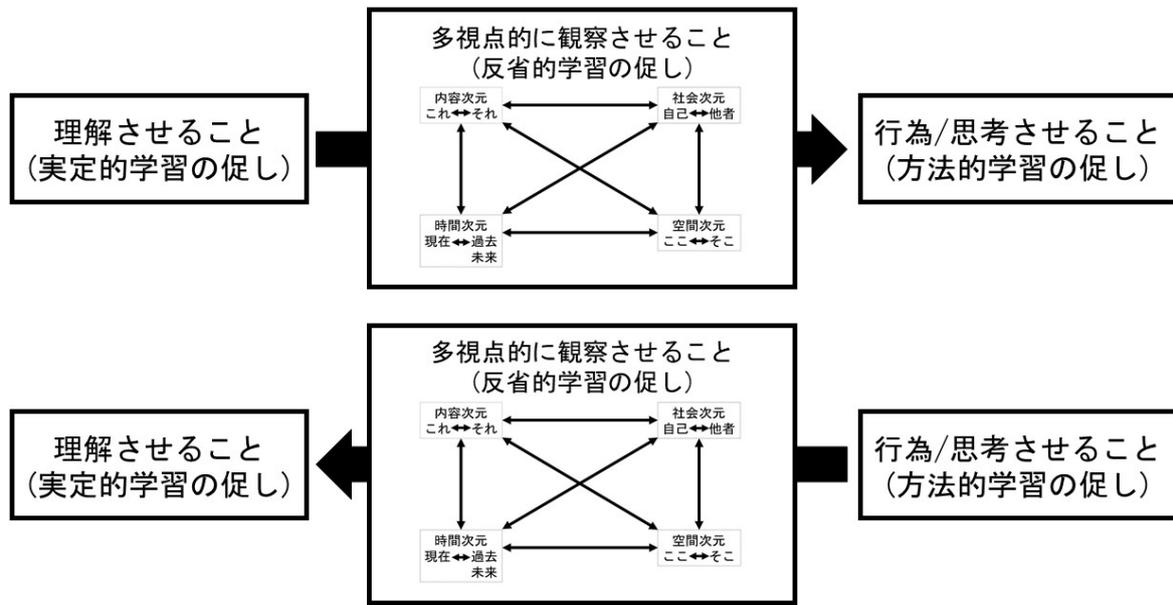


図2: 反省的・多視点的授業の構成理論

参考：本研究の構成

序章 本研究の問題設定および研究の目的

第一節 本研究の問題の所在——問題としての「学校と生活の接続」

第一項 「学校と生活の接続」はいかにして語られてきたか——古くて新しい問題

第二項 学校と生活の「接続」とは何か——接続の時間的關係と空間的關係

第三項 「学校と生活の接続」はいかにして可能か——問題の再定式化に向けて

第二節 先行研究の検討——改革教育研究における本研究の位置

第一項 改革教育の中心的な理念としての学校と生活の接続

第二項 改革教育の「相対化論」から浮き出る先行研究の傾向性——改革教育の是認的な受容

第三項 先行研究の問題性と本研究の独自性——改革教育の是認的な受容を越えて

第三節 研究方法と研究課題の設定

第一項 本研究の研究方法——学校と生活の接続問題に対する問題史的アプローチ

第二項 研究課題の設定

第一部 1970年代の急進的な学校批判とオルターナティブ学校の創設

第一章 西ドイツにおける学校批判とグロックゼー学校(Glocksee Schule) ——「68年運動」に根差す学校と生活の接続方法——

はじめに——「68年運動」と学校批判・学校改革

第一節 「68年運動」による反権威主義的な教育批判・学校批判の台頭

第一項 教育と学校を廃絶する——急進的な批判をめぐる諸言説

第二項 西ドイツにおけるオルターナティブ学校の創設運動

第二節 オルターナティブ学校としてのグロックゼー学校の創設と基本理念

第一項 グロックゼー学校の創設経緯

第二項 基本理念としての自己調整——子どもに対する大人の不干涉

第三節 グロックゼー学校における学校と生活を接続する授業の原理と実践

第一項 学校と生活を接続する「プロジェクト授業」と「範例学習」

第二項 1970年代のグロックゼー学校の授業実践その1: 「交通プロジェクト」——算数の授業におけるゴーカート製作を通じた社会的経験の取り込み

第三項 1970年代のグロックゼー学校の授業実践その2: 「インディアンプロジェクト」——インディアンの生活様式から導き出された批判的態度

おわりに——グロックゼー学校における反権威主義的な学校と生活の接続方法

第二章 批判と修正の中のグロックゼー学校——顕在化するヘンティッヒ・パラドックス(Hentig-Paradoxon)との対峙——

はじめに——グロックゼー学校の自己批判と自己修正

第一節 グロックゼー学校における「ヘンティッヒ・パラドックス」の前景化

第一項 自己批判される創設期の理念——1980年代の「似非(えせ)進歩的教育学」の見直し

第二項 問われる授業像——社会批判か社会への適合か

第二節 ヘンティッヒ・パラドックスとの対峙による似非進歩的教育学の克服

第一項 変容する自己調整概念の解釈とその位置

第二項 学校と生活の接続する授業実践の変化——「色プロジェクト」を事例におわりに——反権威主義的な学校と生活の接続の帰結

第二部 1980年代以降の改革教育的な授業改革と改革批判

第三章 学校と生活を接続する「実践的学習」(Praktisches Lernen)の構想と実践——学習における実践的な行為の要求とそれに対する教授学的批判——

はじめに——1980年代の学校における実践的学習

第一節 「実践的学習」の開始経緯とその理念

第一項 学校・授業改革プロジェクトとしての実践的学習

第二項 改革の理念としての学校と生活の統合

第二節 NRW州における実践的学習の展開と授業実践

第一項 NRW州での実践的学習の導入と普及

第二項 実践的学習の授業構成——ハスペ総合制学校の事例から

第三項 実践的学習の授業実践——プロジェクト授業「デメター農場での無農薬農業」

第三節 「実践的学習」の成果と課題——ドイツ教授学の評価から

第一項 実践的学習における「教授学的反省」の欠如——シュルツによる反権威主義的批判

第二項 「非・補償的機能」を持つ実践的学習の必要性——ケンパーによる批判と提案

おわりに——学校における実践的学習の特徴と問題

第四章 教育政策に浸透する「学校の開放」(Öffnung von Schule)の要求——ノルトライン・ヴェストファーレン州の枠組み構想「学校生活の形成と学校の開放」(Rahmenkonzept „Gestaltung des Schullebens und Öffnung von Schule“)をめぐって——

はじめに

第一節 枠組み構想「学校生活の形成と学校の開放」(GÖS)策定経緯とその普及

第一項 NRW州議会におけるGÖS策定の経緯

第二項 学校・授業改革の方向づけとしてのGÖSの普及と拡大

第二節 枠組み構想GÖSの中身とそれに基づく授業実践

第一項 原案に見られる問題意識と4つの「行為領域」

第二項 プロジェクト授業「住居環境の改善」にみる学校の開放と学校生活の形成

第三節 GÖSをめぐる教育学的批判の諸相

第一項 ヴォレンヴェーバーによるGÖS批判——学校に対する過剰要求をめぐる

第二項 シルメラーのGÖS批判——生活実践による学習の限界の指摘

おわりに——学校と生活の接続をめぐる論点の所在

第五章 プランゲの学校論における「反省的学習」(Reflexives Lernen)——生活との差異に基づく授業の構成理論——

はじめに——授業改革に対する「改革批判」

第一節 学校と生活の統合に対するプランゲの批判とその根拠

- 第一項 1970年代以降の改革教育的な学校・授業改革に対する疑義
- 第二項 学校の成立前提としての偶発性に満ちた近代社会
- 第二節 生活からの分離を前提とした学校の「限界」と「固有性」
 - 第一項 「実定的学習」と「方法的学習」の促しによる学校と生活の接続とその限界
 - 第二項 学校における固有性としての「反省的学習」
- 第三節 反省的学習の促しとしての学校教授構想
 - 第一項 反省的学習における「知の選択」
 - 第二項 選択を方向づける「差異の同一性」
- おわりに——生活との差異に基づく授業の構成理論

第三部 1990年代以降の改革教育批判の改革教育

第六章 改革教育の批判的継承としての学校実験「イエナ・プラン・ヴァイマール」(Schulversuch „Jena-Plan Weimar“) ——多視点的授業と対話的教育に基づく授業改革——

- はじめに——改革教育批判の改革教育
- 第一節 ペーターゼンによるイエナ・プランと東西統一後におけるその復活
 - 第一項 「共同体による共同体への教育」としてのペーターゼンのイエナ・プラン
 - 第二項 東西ドイツ統一後のテューリンゲン州におけるイエナ・プランの復活と学校実験
- 第二節 学校実験の教授学的構想としての改革教育の「現代化」
 - 第一項 学術アドバイザーによるイエナ・プランの批判
 - 第二項 教授学的原理としての多視点的授業と対話的教育
- 第三節 生活との反省的対峙を促すプロジェクト授業
 - 第一項 プロジェクト授業「読み散歩」の計画と実施
 - 第二項 プロジェクト授業「読み散歩」の独自性と課題
- おわりに——生活との差異に基づく多視点的・対話的な授業の構成

第七章 「ヨーロッパ・プロジェクト」(Europa Projekt)における多視点的授業のモデル化と実践——現実を観察する「多」視点的な授業構成モデルの構築とその特徴——

- はじめに
- 第一節 「ヨーロッパ・プロジェクト」成立の経緯とその概要
 - 第一項 東西欧州の共同研究としての「ヨーロッパ・プロジェクト」
 - 第二項 プロジェクトにおける多視点的・対話的な授業の理論枠組み
- 第二節 プロジェクトにおける多視点的授業の実践事例
 - 第一項 生活世界と関連した授業としての「他者の統合と受容」——多視点的・対話的授業の事例その1
 - 第二項 媒介的授業としての「イスラム教の誕生と普及」——多視点的・対話的授業の事例その2
- 第三節 プロジェクトの考察に基づく多視点的授業の理論的修正
 - 第一項 授業における4つの「多」視点とその「転換」
 - 第二項 多視点的授業の意味次元的拡大——生活との差異に基づく授業の「多視点性モデル」
- おわりに——多視点的授業はいかにして学校と生活を接続するのか

終章 本研究の結論と展望

第一節 本研究の成果——「現実の再提示問題」と「学習と行為の因果性問題」から

第一項 反権威主義的な学校と生活の接続方法(第一部)

第二項 実践的学習と GÖS の下での接続問題(第二部)

第三項 生活との差異に基づく多視点的授業の構成(第三部)

第二節 学校と生活の接続問題に対する本研究の示唆

第一項 改革教育の再帰的性格を踏まえた教育方法学研究の必要性

第二項 資質・能力論から現実を再構成する多視点的な授業論へ——学校と生活の因果関係から
相関関係への転換

第三項 学校における反省的・多視点的授業の構成理論——日本の学校教育に対する示唆

第三節 今後の研究の展望

引用・参考文献(欧文)

引用・参考文献(邦文)

映像資料